

北京と東京と

大岩和嘉雄

「芝居でも見ようか
政府が臨時なら」
或る北京人の諷刺を紙上で見
未だに臨時政府のことに思ひ及ぶ
と浮び上る文句。

北京から、東京へ来て見て、改
めてこの句を檢討して見ると、ど
うも政府が臨時であつても、なく
ても芝居でも見ようか」といふ氣
持になる或るものが北京にはある
のではないかと、いふ氣がする。

私は別に芝居が好きでもな
し、それに見てもわからぬと思つ
て最初から見る氣にならなかつ
たが、何となく芝居でも見よう
とする心、生活を樂しもうとする心
そうした心を持たせる或るものが
北京にはあつた。といふことを今
更氣がつくのである。

生活を樂しむ心—それはど
から生れるのか？

つら／＼私の考へるに、北京の
そのやうなよき、環境のよきの第
一は「光線の具合」にあるのでは
ないか。

秋の北京は世界一だといはれる
その世界一たる所以はどこにある
のだらうか？澄み切つた空、即ち
「光線の具合」にあると私は思
はれる。この「光線」あればこそ
朱塗りの柱もひきたち、黄金の聲
も映へやうといふものである。

私は、このやうな光線がふん
だんにそゞがれる院子の邊境に、怒
々と長大な尾ひれを振つて小天地
に自適してゐる金魚の屈たのな
い光景を好まぬものとのおもふ。

そして外界を完全に遮断する外
小なる長城に圍まれて、朝を迎へ
夕を送る静かな生活から、芝居で
も見ようか、といふ生活を樂しむ心
が、自然に浮び上つて来るの常
然かも知れぬと思ふのである。

これにひきかへ、東京の生活は
如何？「環境佳良」といつても北

京のよきから見たら極段の差があ
る。それに第一お値段のところが
相當のものである。私は目下環境
佳良の住宅を物色中であるが、い
まの東京でそのやうな良好な環境
を望むといふことが無理だと思は
れて来たのである。もしも北京の
よきを忘れかねて、無理にも環境
の佳良をねらふならば「食」の方
を相當程度に切り下げねばならぬ
現在の私の住家は終日太陽のあ
たることのない家である。三年間
世界一の「光線」をふんだんに浴
びて育つて来た身にとつて、太陽
の照らない家はやはり切れない思
ひである。

北京の生活と、東京の生活とを
比較して見て、私は二つの生活の
うちに對照的な精神の伏在してゐ
ることを發見した。生活を樂しむ心
と生活を闘ふ心と。

北京のやうなところに住んでゐ
ると、このやうな平和な環境、お
だやかな天地のどに血なまぐさ
い戦争などが行はれてゐるのか、
とさへ思はれ、不思議な氣がする
こともあるが、東京はさきにあらず
見るもの聞くものすべてが戦争遂
行のためであり、胸にピンと應
るのである。

先日うちのものが、ひつ越しそ
ばがはりに北京から特産の細綿の
タオルを近所隣りへ挨拶したとこ
ろ、何よりのものと非常に歡迎さ
れたさうであるが、あとで話に
「あの奥様は私達に細綿を下さつ
てアトで後悔するのでないでせう
か」とうわさをしたとこのこと
だ。この一事をきいて、細綿に苦
しみつゝも聖戰遂行のため、己が
臍帯を守つて戦ひつゝある主婦の
健氣な心意氣が強く私の胸をうつ
たのである。

り組の申すには「今度純綿のタ
オルが十一軒に一本の割合で配給さ
れることになりましから、抽籤
して下さい」と云々。

北京から相當の量を賣ひだめて
来た身にとつては、「十一軒に一
本の比率」は驚異に値すること
であつた。もてる者の有難さを感じ
てこの貴重な抽籤の権利を即時放
棄したことが勿論である。

このやうな純綿物語を書いてゐ
るメンメンと盡きるところがな
いし、また餘りの種のことを書
きながら、重慶方面から再び
利用されぬとも限らないから、
この程度で「衣」の問題は打ち切
ることとする。

北京にゐた頃、海軍のF少将から
たびたび時局を憂慮する言葉を聽
いたが、そのうちで今でも記憶に
残つてゐる文句が

「日本はまだまだ苦しまねばな
らぬだらう。いまは勝手元は洗
ひ流しの飯粒がこぼれてゐるや
うな餘裕さへなくなるだらう。
そやうなつて初めてほんとの日本
の姿が現はれて来る」

この話を聽いてゐた時は、その
やうなことは遠い話だと思つ
て聽き流してしまつたが、それ
から間もなく七分搦ぎとなり、タ
イ米となり、代用食となり「食」
の問題がだんだん深刻となつて來
たのである。

たのである。

昔は(といつても私はまだ非常
に若いのであるが)大の男が、飯
がどうの、米がどうのと愚痴をこ
ぼすやうなことは、何かしら淺ま
しいこととして片付けて来たので
あつたが、今はさきにあらずして、
米の問題は最も眞剣な切實な問題
となつたのである。

私は、東京へ来てから食慾が非
常に旺盛となり、三度のメシがう
まくて仕様がなないのである。北
京にゐた時も、喰ふことは人並みに
上に喰へて来た次第だが、總局食
堂のメシだけは幸福感を伴つて咽
喉を通すわけには行かなかつた。
タイ米の混合率が應酬的に多かつ
たのである。あのメシがのどを通
るときは「今こメシが胃の腑へ向
つて下がりつゝある」として精神
あるならば、恐ろしく食道にして精神
あるならば、このやうな複雑物に
も等しい米粒など通過せしめたく
はないと思ふであらう。

かういふ御時勢であるから、日
本米のあの何ともいへぬ舌ざり
食道を通過する時の薄たたりた情
感など贅澤だといへばそれまでだ
が、何としても自ペースの中に近
いタイ米奴には我慢の耐えぬもの
がある。古人のいふ「臥薪嘗膽」
は口でいふ分には簡単だが、いざ
となると容易ならぬ事柄であるこ
とが分るるのである。

がて占領地では「饑屋さん」と愛
稱される我がヒロシ達なのである
無論「饑屋さん」と愛稱される
かつといつて諸君は彼らにひとな
つて人相を想像してはならぬ
い。戦線のテンポは早い。この物
語の第二章になると彼らの店頭に
は饑頭の他に安撫車やマツチヤタ
オルやその他う高く積まれた雜
貨品を見出すことが出来る。やが
て支那人が復讐して来る。日本人
が更に入りこんでくる。彼らの賣
上帳が鼻紙から近代的なノートブ
ックに移つたといつたら、諸君は
彼らの發展がいかに物憂いもので
あつたかを理解しなければならぬ
一つの場として、やがて「饑
頭屋さん」の看板が取り外され代
つて「雜貨店」の看板が田舎芝居
の書割のやうに登場して来る。そし
て時が経つにつれてわが「雜
貨店」が範圍を擴げられた商品取
引の中に利益を見出し、貿易の真
似事に若干の興味を覺へてくるこ
とも無難ありさうなものである。

やがて彼らは「貿易商」に
し協力者が三人居れば「三共」と
いふ至極背ける屋號で、發展的生
長を遂げる。その頃になると、現
地の商品取引の事情に委しい二三
の支那人が雇傭される。又その頃
になると彼らがいささか浮き／＼
した氣持になつたとしても誰かが非
難し得よう？怪しげな食堂の女が
落籍される。中國人の業々しい表
現法を借りれば、彼女は今や「大
太太」(東方様々)である。我
々として下品な服付で彼女を驚視
めることが止めねばならぬ。まして
彼女が「分層長」とかいふ白
い襟をかけるやうになると尙更の
ことである。

私はこの物語に結論を與へよう
とは思はぬ。成功した話といふも
のは、恐らくしばしば他の失敗し
た話によつて、正に背刺にふれた
結論が與へられるものである。

昨年九月鼓浪嶼問題が解決し、
大陸と廈門との交易が復活するこ
とになると、廈門のすし屋や玉菜

歴、それから豆腐屋の製菓やカフ
エのマダムといふ有象無象の輩ま
でが、興亞院連絡部に日毎詰めか
けて許可申請書を提出したもので
ある。しかしこゝでは當局の方針
正しきを得て誰も買易商になり
そこねてしまつた。

「聖戰」は解決しなければなら
ぬ。いさ／＼な問題を持つてゐる。

感心した中國女性

私が廈門に赴いたのは雨期の終
つた昨年六月、中山公園には鳳
凰樹の紅の花が咲き亂れ、ユカ
リ樹の緑は花崗岩塊よりなる廈
門の山肌を映へ、南支の夏は色彩
鮮かであつた。私は廈門滞在中日
課の如く毎朝未明に起き出て中山
公園を抜け、興亞院連絡部の裏の
山々にさすらすと出た。(日曜には
今は少将となつて某要職に轉出し
てゐる政務部長の巨大佐と連れ立
つてこの山を越へ更に禪寺で有名
な南普陀まで足を伸ばしたもので
ある。いさ／＼と足踏した、あちこ
ちの、森藪や山あひから、閑寂な木
魚の音が朝霧に包まれるやうに流
れてくる。耳をそばたると谷水
のせらぎに混つて、どこかで放
羊の群がサクサクと草を喰んでゐ
る。私は廈門の朝が殊に好きであ
つた。

私はこの散策の途次よく一群の
うら若い中國の女性に出會つた。
彼女達はいつれも運動靴にジャン
パーといふ輕装であつた。それは
たしなみを忘れたものではなかつ
た。私は彼女たちにつゝ、まじやか
な好奇心を感じた。しかし彼女た
ちが夜の遅いダンスであること
を發見した時は、私の好奇心は
寧ろ敬服に耐へぬ氣持になつた。

私は一日彼女たちと共に、漸く戸
を開けはじめたミルクホールに入
り、このへんで搾乳される青草の
香り強いミルクを呑みながら話
合つた。私は彼女達の胸片に感服
してゐる同僚に向けた激しい非難
の言葉を未だに忘れることが出来
ない。日本のこの種の女性だつた

大陸どころへ

齋藤 立彦

私は昨年六月渡支、廈門の五ヶ
月を振出しに、海軍島、それから
無湖、安慶、九江、岳陽等揚子江
筋の大小郡邑に轉々とし、北支蒙
疆の地を踏んで去る十月二十日久
方ふりに内地に歸つて來た。以下
は全く印象的な支那雜記であ
る。

饑頭屋が貿易商 になつた話

この話は支那の日本人について

胸糞の悪い從軍僧

本年四月末行はれた青島作戦の
時であつた。わが軍回部隊は、
青島南門外四キロの嶺々たる九華
山脈の峻嶒を突破、青島縣城を華
の背後より衝いた。その時である
我が從軍僧にとつて、この法府輝
く九華山—それは山西の五臺山と
並み稱せられるものである—は
一つの物狂はしいまで暗示的な魅
力となつた。從軍僧は九華山の伽
藍をそこらに認められてゐる經文や
佛像や、恐ろしく又その財寶につ
て想像して見た。それは彼にとつ
て微笑ましい限りのものではあつた
若し九華山を支配することが出来
たら、自分を放逐した故郷の寺、
自分から失はれた檀家といふもの
は抑々何であるか！彼は九華山
の確據について熱心に部隊長に
進言した。私は劍を持つたマホメ
ドの姿を思ひ浮べて見た。この
歴史的事象は、しかしもつと醜
惡なものである。

景氣のパロメータ

——この事變で誰が一番儲けたで
あらうか。恐らくそれは支那人自
身ではないかと思ふ—と青島で
ある特務機關員が私に話した。

胸糞の悪い從軍僧

本年四月末行はれた青島作戦の
時であつた。わが軍回部隊は、
青島南門外四キロの嶺々たる九華
山脈の峻嶒を突破、青島縣城を華
の背後より衝いた。その時である
我が從軍僧にとつて、この法府輝
く九華山—それは山西の五臺山と
並み稱せられるものである—は
一つの物狂はしいまで暗示的な魅
力となつた。從軍僧は九華山の伽
藍をそこらに認められてゐる經文や
佛像や、恐ろしく又その財寶につ
て想像して見た。それは彼にとつ
て微笑ましい限りのものではあつた
若し九華山を支配することが出来
たら、自分を放逐した故郷の寺、
自分から失はれた檀家といふもの
は抑々何であるか！彼は九華山
の確據について熱心に部隊長に
進言した。私は劍を持つたマホメ
ドの姿を思ひ浮べて見た。この
歴史的事象は、しかしもつと醜
惡なものである。

胸糞の悪い從軍僧

本年四月末行はれた青島作戦の
時であつた。わが軍回部隊は、
青島南門外四キロの嶺々たる九華
山脈の峻嶒を突破、青島縣城を華
の背後より衝いた。その時である
我が從軍僧にとつて、この法府輝
く九華山—それは山西の五臺山と
並み稱せられるものである—は
一つの物狂はしいまで暗示的な魅
力となつた。從軍僧は九華山の伽
藍をそこらに認められてゐる經文や
佛像や、恐ろしく又その財寶につ
て想像して見た。それは彼にとつ
て微笑ましい限りのものではあつた
若し九華山を支配することが出来
たら、自分を放逐した故郷の寺、
自分から失はれた檀家といふもの
は抑々何であるか！彼は九華山
の確據について熱心に部隊長に
進言した。私は劍を持つたマホメ
ドの姿を思ひ浮べて見た。この
歴史的事象は、しかしもつと醜
惡なものである。

胸糞の悪い從軍僧

本年四月末行はれた青島作戦の
時であつた。わが軍回部隊は、
青島南門外四キロの嶺々たる九華
山脈の峻嶒を突破、青島縣城を華
の背後より衝いた。その時である
我が從軍僧にとつて、この法府輝
く九華山—それは山西の五臺山と
並み稱せられるものである—は
一つの物狂はしいまで暗示的な魅
力となつた。從軍僧は九華山の伽
藍をそこらに認められてゐる經文や
佛像や、恐ろしく又その財寶につ
て想像して見た。それは彼にとつ
て微笑ましい限りのものではあつた
若し九華山を支配することが出来
たら、自分を放逐した故郷の寺、
自分から失はれた檀家といふもの
は抑々何であるか！彼は九華山
の確據について熱心に部隊長に
進言した。私は劍を持つたマホメ
ドの姿を思ひ浮べて見た。この
歴史的事象は、しかしもつと醜
惡なものである。

無敵彼らの蓄積された富といふものは巧妙に隠されて、外面から窺ふよしもない。しかし大體の推論は出来るのではない。青島だけの話だが、事變前彼らが預備貯蓄の金を蓄積した件数といふものは一ヶ年にせいぜい五六件を用なかつた。しかるに昨年だけで、それは五十件に近い数字に上つてゐる。青島の日本人の都合にこんな威嚇はよくはない。無論一面にはこの事變で最も蒙受してゐるものも支那人であるが……

戦線に於ける我が同僚

最後に戦線に苦勞してゐる應召のわが同僚諸君の消息について書かす。
軍曹寺崎盛男君(調音局)「昨年の終りだつたか、いまだ獨身の私にとつて甚だ希望に堪へぬ結婚案内状を送りつけて、その後消息のなかつた、寺崎君のことを北京に來て聞いた時は嬉しかった。一日彼のゐる部隊に電話をかけて見たが生憎留守、慌しい旅のために

秋に鍛える!!

箱根八里を

社會部

「旅行」これが最後になるかも知れぬ」といふのが東京驛頭での話題だつたが、栗林部長、山本次長以下一行二十名は十七日午後登山電車に揺られて秋雨の強弱に悩まされた。秋の身にしみて誰も湯を争ふ。腰椅子にもたれて山峡の閑寂を愉しむ者、靜かに鶴鶴を眺む者の中、パイの音がききは賑やかだつた。山の幸に百散を打ち、こゝ数年來讀いた君ルートのピールに「同謝意を表しつゝ」このルートもこれで遮断か」等と談大

鬼怒川行

調査部

いよいよ。明けて十八日、空は晴れて紅葉が美しかった、ケープルで早雲山着、再びバスに揺られて大洞谷へ。富士を下にに見て名物のうで卵で元氣をつけ若の湖までゴッソリした裏の石路を歩く。すゞきあり、桔梗あれども強行「時間たまりのハイキングに大陸の晴れた往くやうな氣持を味ふ。蒼蒼高い箱根八里をバスで越へ十國峠を下つて午後三時過ぎ熱海で解散した。楽しかつた。

つひにそのまま會つて話す機會なく北京を去らねばならなかつたこととはかへすがへす残念であつた。例の鳩胸を張り乍ら北京の總局にも時々出現するといふ話であつた。中尉中村信君(編輯局)「この十月内地へ歸還の途中、上海の平柳君ととも蒙羅に足を踏み入れた際、彼と蒙羅さんで會つた。一夜蒙羅通信の三藤さんと交へ、夕飯をついた。中村君は「社の月給をたゞ貰つてゐるもの何だから、何か現地の調査報告でも送りたいものだ」と頗る恐縮してゐた。
一等兵山崎君(神戶支局)「私は安藝備中彼に三度會つた。始めは青陽作戦の時である。占領直後の青陽の市街を五經理部長と同道視察してゐると、町外れの破壊された家屋の中から、突然「敬禮」の聲がかゝつた。見れば飯盒炊飯中の一隊であつた。そのなかで私は鶏の毛をむしつてゐる我が隊山一等兵の戰艦に塗れた姿を見出したのである。
向寒のみぎり、陣中のわが同僚諸兄の武運長久を心から祈つて止まない。

大運動會で

中支總局

秋の新聞休日の十七日には總局全員が一緒になつて楽しみ遊ばうとの議が起り、結局大運動會を賑やかに催した。日本俱樂部の附屬館をまる一日貸し出して万国旗を紅白の幕で飾り立てた素晴らしい會場を造つた。お客さんには上海に在任の社員家族七十名が殆んど全部顔を出した。
午前十時、集合整列、皇居遙拜、皇軍感謝の默禱をなし大社旗を掲揚、次いで競技に入つた。五十米百米競走は参加者が多く、體力に

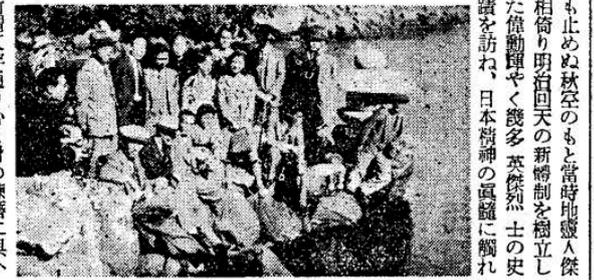
他共に任する我調査部同人が鍛錬の秋に選んだのが鬼怒川のコースである。十月十七日の 節、内海部長以下調査、調報、旬報、年鑑の勞友廿一名は午前七時五十分東京武蔵野に集合、「野急」とは名のみのスロ、モー電車で揺られて十一月時鬼怒川温泉着、直ちに旅館水明館に寛いだ。けだこの旅館たるや一週間前かから予約して辛うじて費食取時間の休を取らなかつたものなのだから、相も變らぬ温泉氣なる哉である。早くも浴衣どてらに寛いで怪しげな團體を戦はすもの、温泉に浸るもの、折かびの晴れ間に太陽を浴びて伸び伸びと午睡をたのしむものなど、都度から解放された一日は賑やかなものだつた。晝食をしたためて三々五々土産物みやかしやら大洞あたりまで散策したが、未だ秋色にはや、早い、ようだ。町上の「租界」に迷ひ込んで危うく捕虜になりかけた一團の武勇傳もあつて、温泉情緒を満喫、至極おとなしい温泉デパートを送つた。午後二時五十六分鬼怒川温泉で一路東京へ。午後六時半とつと暮れ、浅草の街の灯に吸ひこまれた。
「今年」で牛肉鍋をついて豪華晚餐をとり、一人一本の割當に陶然として日頃の勞を忘れ歌をつくした。かくて同九時頃浅草界隈で解散、愉快だつた一日を終つた。

遺跡巡り

關門支社

昨年の秋も、又今年の春も雨に祟られ折角頭を捻つて計畫決定した阿蘇登山行は二度とも遂に講研に期してしまつたので、一度旅行を中止してしまつたので、今度こそは二度とやらで今度こそは阿蘇行を敬遠し、新體制下最も意義深い所謂明治新體制の發祥地として青史に輝やく山口縣下秋の「勳皇烈士遺跡巡り」を計畫したが、これに参加するもの支局社員連にボーイ君を合して四十二名、會つてなき勢勢な進行部隊が出来上つた。一行は十七日午前八時、下關發の遠出であつた。本隊は参加者の

自身のない年長者側から「若いのとそうでないのと二班に分けなくちゃ不都合だ」との申入れがあつて、二十九歳を境に二組に分けた。曹段から競走などに凡そ縁の遠い連中はかなりなので、練習は自然と敬遠し、ボンとビストルが鳴つたら全力を盡せる作戦。だからスタートより直しの場合、五十、百全部駆け通して仕舞つた者はがっかり疲れ果てた恰好で棄權する仕末である。
フィールドでは「砲丸投」と「走田跳」の二種目、警備で十ボンドの砲丸七名を越えぬ者は失格だから約二十名が出場して半減した。一等は若水編組、九米三三である。「走田跳」の後選でも二十名以上が出場したが三米五〇、四米あたりで殆んど失格、一等は安藤(寫眞)の四米七。



も止めぬ秋空のもと當時地獄人傑相倚り明治回天の新體制を樹立した偉勳輝やく幾多英雄烈士の史蹟を訪ね、日本精神の眞髓に觸れ

靈峰を縦走

福岡支社

所謂文字通り心と身の練習に與へられた解放の一日を有意義に過した。
雨師風伯に挫かれて愁みをのんだ春の新聞休日に引かへ秋高肥馬

大部分が論功行賞と支局部隊の通信で連徹徹夜しまどろ暇もない。暗闇に彼にもまれて博多驛發の水郷日田行である。参加者三十餘名露立置むる須後川畔を遡つて日田驛着、町の觀光課長以下に迎へられ快い美聲の女陣から説明を行くゆく聴取り乍ら社旗を先頭に進行するのだつたがこの日女性陣の賑やかな馬鹿目目を惹く。慈眼寺の國寶善薩も一行のため特別開帳の國寶善薩の威宣園も同輩人たちのため門戸を開かれる。最後に三隈の清流裏を流る龜山公園で町の心盡しの茶葉の饗を受け晝食後愈々符望の寫眞競技會を河畔、川上の隣所に展開。かくて上乗の印象裡に詩趣豊かな天願の景勝地日田を辭し歸郷後河畔、暖湯温泉に浴を洗つたのだつたが發送屋を主體とする若人部隊は一日間の徹夜の疲労ものかは靈峰須賀山を踏んで出陣、未明山頂を極め壯觀比なき御來光を拜して同輩の方歳を高唱、連山縦走後若杉山を下つたが一夜を山の上のテント内に送り十八日朝霧瀾たる元氣で若人の意氣を見せつゝ、歸社直にその日の部室にいたのだつた。

越境ハイク

長野支局

柏原といふ所は信越國境の分水嶺高原に、徳川初期に新設された信越が加賀の段々をはじめ北越の諸侯が參觀交會のために往來した

ところだ。又併せ一茶を生きた土地としても有名、今尙多數の文人墨客が杖を曳く。我ら支局員(オベ君も参加)十數名の一行は、新聞休日を利して一茶の墓に詣で、野尻湖を半周して南方に黒姫の優美を山姿を眺めつゝ、信越の國より越後の國へ越境、今は死火山の妙高の峻峰を眼前にテテリ懸け池の平より赤倉へとハイク(オベ君は御利した)して一日半を有効に便り果した。
常支局では十月十七日の新聞休日を利用して、財勢と健康増進をかね、全員打そろつて昨年十一月須崎より新たに開通した久禮にハイキングに出かけた。午前七時第一線部隊に女子車をも加へた全員が高知驛に集合、同十七分發列車で土佐安和にいたり、こゝで下車、同時に同八時四十分、リュックサックを背負つた國澤、大鹿兩君をガイドに、右手に斷崖、左手に怒濤岩をかむ太平洋を俯瞰しつゝ、五キロの道を國民進軍歌、隣組の歌等を口吟みながら行く。晩秋とはいへ、土佐路の日中は汗ばむ位だ。夏服の上へも脱いで頑張ること三時間餘にして正午頃漸く目的地久禮につく。久禮神社に參拜して皇軍將士の武運長久を祈願、海岸にいたり炊き火をなし、附近を散策したのち午後六時十七分高知着列車で歸る。かくてたのしき休日を一局團樂の内に有意義に過ごすことが出来た。

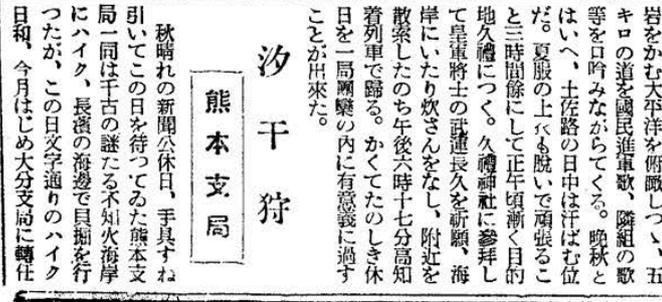
久禮詣で

高知支局

秋晴れの新聞公休日、手具すね引いてこの日待つてゐた熊本支局一同は千古の謎たる不知火海岸にハイク、長濱の海邊で貝掘を行つたが、この日文字通りのハイク日和、今月はじめ大分支局に轉任

熊本支局

秋晴れの新聞公休日、手具すね引いてこの日待つてゐた熊本支局一同は千古の謎たる不知火海岸にハイク、長濱の海邊で貝掘を行つたが、この日文字通りのハイク日和、今月はじめ大分支局に轉任





家族運動會

新聞休日の十七日全社員甲乙兩班に分れ、甲班は家庭子供連も入れて七十餘名、朝九時京城驛集合...

互助會報告

(十月)

出生 貞雄(大阪支社)長女出生 石川 元吉(福岡支社)三男出生...

人事

村野 敬雄(本社通信局)病氣見舞 菅野 浩歌(名古屋支社)同 栗田 潔(名古屋支社)同...

編輯局 飼手 豊四 シンガポール支局勤務ヲ命ス(九月三十日附) 總務局長 小寺 信重...

依願解職(九月卅日附) 京支社 飯田 慶介 依願解職(十月一日附) 依願解職(十月一日附)...

依願解職(十月十一日附) 依願解職(十月十二日附) 依願解職(十月十四日附)...

依願解職(十月十五日附) 依願解職(十月十六日附) 依願解職(十月十七日附)...

昭和十六年版 各方面展望の「昭和十六年版、同盟時年鑑」が愈々近く出来し...